一章

「先輩、ムラムラしてきた？……えっちする？」
あなたは今――
ソファに横並びで、彼女と共に映画を眺めていた。
彼女が勧めてきた恋愛物の映画。最近人気の俳優と、最近人気の女優が、不治の病を前に永遠の愛を誓うという定番の代物であり、あなたは視聴しながら苦痛にも似た感覚を抱いていたのだが――
それは、彼女も同じであったようだ。
「面白い映画は、作品に夢中になってしまうので――
えっちなことをするときは、見なくてもいいような映画にする」
というのが、彼女の中のマイルールだ。
わざわざ、サブスクサイトの中から評判が低いそれを選んだのも――
今のこの瞬間が目当てであった、ということだ。
あなたは、彼女の髪を優しく撫でてやる。
「んっ……あ……っ♪先輩に撫でられるの……好きだなぁ、私……んん～……♪ねっ？……先輩は……ムラムラしてないの？……私はね、すっごくムラムラしてるけど……っ♡」
肩にもたれかかりながら、あなたを上目遣いで見つめてくる美少女――
それが、あなたの恋人の黒嶺蓮だ。

「先輩……おちんちん、大きくなってるよ？……んふふっ♪いつも私のこと……い～っぱいいぢめてくる、悪いおちんちんさん……っ♡お～いっ♡きみもぉ……えっちしたいんじゃないの～？……大好きな蓮ちゃんとぉ……一杯、遊びたいよね～……っ♡ほらほらっ、先輩っ♡”だしてほしいよ～”窮屈だよ～”っておちんちんさん、困ってるよ？」

あなたの股間をすりすりと撫で回し――

冗談めかした口調とは正反対の、熱っぽい瞳であなたを見つめてくる彼女。

あなたは、彼女の腰に腕を回して”ぐっ”と抱き寄せる。ただのそれだけで、もう、彼女の肉体は骨身に染みこんだ快楽を思い出したのだろう。「あ……っ♡」と小さく呟いた、本能で雄に媚びた嬌声は、幾万の淫語よりもあなたを興奮させる代物だ。

「……口ですればいいの？……今日、生でも大丈夫な日だけどぉ？……んっ、今日は口でされたい気分？……じゃあ……ズボン脱がせるね……っ♡あっ、先輩は映画見てていいからね……？……あっ、いいってばぁ♡……どうせ、映画なんか途中で飽きてぇ……えっちする気満々だったから……つまんない映画にしたんだし……っ♡」

彼女はあなたのベルトに手を回して、カチャカチャとそれを外していく。

口淫奉仕は女性にとって、快楽は存在しないのだが――彼女にとっては、あなたが快楽に顔を歪めるそれは、自分が気持ち良くなるよりも大事なことなのだ。

これほどまでに自分を愛してくれる恋人というのは――

３５点の女ですら、通常は滅多に見つけられないのだ。

それなのに、あなたは１２０点の美少女から先輩と呼ばれて、愛情をたっぷり注がれているのだ。ベルトを外されるときの、期待に満ちたあなたの表情まで”じ～っ♡”と見つめて、嬉しそうに微笑んでくれる忠犬のような恋人。あなたはどうしてこうなったのかと、そればかりを考えた。

黒嶺蓮は、あなたの一歳年下の、現在大学一年生だ。

頭も要領も良い彼女は、もっと上の国立大学を狙うことも出来たのだろうが――「そこにはあなたがいないから」という理由で、担任や学年指導の勧めを振り切って、あなたの後輩になることを願ったのだ。彼女の父親も、「そこだと家から通えるから、私に変な虫が付かなくて済むよ？」と娘に言われれば肯定をする他になく――それでいて、いざ大学に進学したら一人暮らしを始められたのだから、かわいそうだなと感じてしまうが――閑話休題。

黒嶺蓮は茶髪のショートで、少し垂れ目の美少女。

争い毎とは無縁にある、穏和な顔つきであり――

それとは正反対に、破壊力抜群な肢体をしている。

スリーサイズは上から８８－５９－９０のＦカップ。

あなたは彼女と幼稚園の頃からの幼馴染であり、その成長を最も間近で見た上に――
恋人としての立場もあるので平静を取り繕えるのだが、他の男達にとっては違う。
彼女のバストサイズは、高校入学時点ですでにＥカップあったのだ。
制服のブラウスを、下から持ち上げて布地をパンパンに張り詰めさせる、美少女の８５センチＥカップ。男達は、何度も何度も、蓮に告白を繰り返した。「既に彼氏がいるとしても――その告白の内、一回でも彼女が首を縦に振れば”勝ち”であるし、優しい彼女が同情をすれば、もしかしたら一発くらいヤらせてもらえるかもしれない」という彼らの思惑。否定が出来ないのは、あなたが黒嶺蓮を恋人に出来た、世界一贅沢な男であったから。自分の手元に、彼女がいなかったときにどんな行動を取るのか。男がどれだけバカか、というのは、他ならぬ男である自分自身が一番知っているので――
彼らを、どうしても笑うことが出来ないのだ。
勿論、あなたにだって、黒嶺蓮は不釣り合い。
彼女に相応しいのは運動部のインターハイに出場するような、モテモテの男子生徒か――あるいは実家が極太で大量の金と取り巻きを欠かすことのない、ヤンキー風味のヤリチン男子に違いない。あなたは自分に特別な取り柄がないことを、誰よりも自負しているのだ。ただ、自分が蓮の特別な個性に気がついたというだけの話であり――
彼女が高校一年生の春に――
「……先輩って、嘘を吐かないんですね……っ♪」
と、放課後の図書室で唐突に声を掛けられて――

「先輩……もし、もしですよ？今……お付き合いしてる人、いなかったり……そ、そのですね？……男子高校生さんのぉ……せ、性欲……解消したかったりしたらぁ……

私と付き合うとか……えっと……どうでしょう……？」

まさかの――

彼女からの、逆告白を受けたのだ。

馴れ初めを語っても「あなたが黒嶺蓮から告白された」では誰も信じないので、今となっては語ることもなくなっている。「なんか、どっちかが好きになって、それで告白して、的な」という、エピソードトークが超絶にド下手な人間になっている風評被害はあるのだが、それで蓮の安らぎが得られるのだから問題は無い。

なぜなら――

黒嶺蓮は、他人の嘘がわかる少女なのだ。

最初にそれを自覚したのは、蓮がテレビに映るラーメンに夢中になっていたとき。「この子は本当に食いしん坊だなあ」と父親が言い、「蓮はあなたの娘だからね」という母親の言葉であったのが――彼女にとっての、最大の不幸でありトラウマ。その瞬間から、彼女にとっては優しい嘘も、悪意まみれの嘘も、同様にして”嘘”なのだ。

ライトノベルのヒロインのような設定だな、とあなたは感じており――

一方であなたも、嘘を吐くのが苦手だった。

それは蓮のようなかっこいい特殊能力とは異なり「なんか自分が喋ると、場の空気が変になる」と

幼い頃からわかっており――故に、嘘を吐くくらいなら無言であればいいと思う性質。幸いなことに「こいつ、言いにくいことがあるとすぐ無言になるな」という”キャラクター”と共存することで、どうにか生き延びていられたのだが――

あなたの、どうしようもなく凹んだ、人間として歪な部分に――

黒嶺蓮の、どうしようもなく凸出した歪な部分が、ガチりとハマったのだ。

”嘘を吐かなくてもいい”というのは、あなたにとっても蓮にとってもあまりに気楽なのだ。黒嶺蓮にとって、あなたは世界で唯一の優良物件。「優秀な男であれば、逆に、誰かのために優しい嘘を吐く」というのが、蓮を狙った男達の大不幸だ。優秀な男でも、無能な男でも、ともに嘘からは離れられないのが人間の本質であり、その嘘が存在するからこそ、人間社会は８０億人で共存出来ているのだろうが――

人間として不器用すぎて、嘘を吐けないときは黙るしかないあなたは――

その８０億人の中で、唯一、蓮にとっては安らぎを得られる存在なのだ。

彼女と付き合うことになり、初体験を済ませたのは――

告白をされてから、五分後だ。

あなたに罪はない。

蓮に「私と付き合うなら、嘘を絶対に吐かないでください。嘘を吐かれたら、その瞬間に別れます

から」と言われて――
「先輩は……私と付き合ったら、何かしたいことありますか？」
と、聞かれたら――
もうそれは、男にとっては詰んでいるのだ。
「嘘を吐いちゃいけないから」という大義名分があり、あなたは男子高校生。当時から既に胸が膨らんでいた彼女は、男達にとって性欲をぶつけられる格好の存在。「黒嶺とヤりてぇ～」と性欲を剥き出しにする男子生徒は、彼女を口説くのに”嘘”を吐き――「いや、女性をそんな目で見るのは失礼だ」と彼女に惚れさせようとする男子生徒も、結局は嘘を吐くのだ。
だから、多分――
黒嶺蓮は、嘘を吐かないあなたは性欲も薄いと思っていたのだろうが――
”……っ”
それでも――
それでもあなたは、最初の一回は抵抗をしたのだ。
言いにくいことは言わず、無言のまま相手の目を見て”どうにか察してくれ”というのがあなたのスタンスだ。黒嶺蓮もそこで気がつけば良かったのだが――彼女にとって、あなたは世界で唯一、嘘とは無縁の位置に存在する運命の王子様だ。
「大丈夫です、私は、少しくらいえっちなことでも……受け入れてみせます！」
と、あなたに告げて「さあ、さあ！言ってください！」と促されたので――

”幼稚園の頃からの幼馴染で、ずっと、横目で眺めるだけの高嶺の花だった黒嶺蓮と――
放課後の図書館でセックスしたい”――
と――
あなたは、告げる他になかったのだ。
黒嶺蓮もそこで顔を真っ赤にしながら「破廉恥なことは、もう少し付き合ってお互いを知ってから」と言えば良かったのだが――彼女もまた、唐突に漏れ出たあなたの”本当”に混乱をしたのだろう。嘘を吐けないのは、彼女自身も同じなのだ。
「私も……その、興味はあるといいますか……強引に、組み伏せられて、押し倒されるのも嫌じゃなくて……あっ、でも……まだ、付き合って五分ですし……五分で、そういうことになるのは……」
と、もにょもにょ何かを告げるばかり。
ああ――何度も繰り返すが――
そのときのあなたは、まだ、蓮の取扱い方を知らなかったのだ。
”嫌なら、なんで逃げないの？”
と、尋ねてしまえば――
「ほ、本能的に……逃げるほどじゃ、なくて……っ♡
私、その……結構、えっちで……変態なので……
先輩が、押し倒してくれるなら……
初体験、そ……それでも、悪くないかなぁ……って……♡」

そう返答をする他になく――
断言をするが――
股間にちんぽを生やして産まれてきた雄が、黒嶺蓮のような美少女にお誘いをされて抵抗をするのは無理だ。
あなたはそのまま、黒嶺蓮を机に押し倒した。
制服越しに誘惑と挑発をして、男子生徒のズリネタになっている彼女の８５センチＥカップ。
新一年生の春であり、まだ制服の手触りもサラサラのすべすべ。彼女のうなじに顔を寄せると、甘い花の香りが漂っている。乳房を乱暴に揉みながら、うなじを舐めて、耳を甘噛みする。勃起した逸物を臀部に、何度も、パンパンと打ち付けるのだ。ズボン越しであり、スカート越しでもあるそれは”セックスごっこ”と呼ぶようなもの。背後から覆い被さり、彼女の頭部を掴み、乱暴な体位で舌を絡めるキスをして――あなたは、ファーストキスを彼女に捧げて――
黒嶺蓮の、ファーストキスを奪ったのだ。
現役ＪＫ１、一歳年下の、学校中の男子に眼を付けられている美少女の乳を揉み、舌を絡め合わせて、肉棒を尻に擦りつけるという”バカの妄想”とでも呼ぶべきそれを、あなたは現実にしているのだ。窓の外、グラウンドでは部活動に励む生徒達の声が聞こえてくる。彼らが三年間、汗水流して手に入れた全国制覇の栄誉ですらも――最上級の美少女を恋人にして、抱くという状況の前ではあまりにも霞む代物であり――
あなたはそれを、棚ぼた同然に手に入れたのだ。

彼女がもう少し醜ければ――もう少し、性欲が慎ましければ――そうはならなかったかもしれない。だが――”やっぱりやだ？””嫌なら言って、すぐにやめるから”とあなたが尋ねても――

黒嶺蓮には嘘は許されていないのだ。

「いやじゃないです……っ♡い、いや、です、けどぉ……っ♡こころは、やーやーでもぉ……からだは、やじゃないです……っ♡きもちよくて、んんっ♡らんぼうで、ごういんに……っ♡れいぷされちゃうの、すっごい、もうそうしてて……っ♡あっ♡んぐ……っ♡だい、だいじょうぶですっ♡しょじょ、ですけど……しょじょ、らんぼうに、ちらされるのもこうふんしてぇ……っ♡あっ、は、はい……っ♡きすも、はじめて、ですけどぉ……っ♡むちゅうに、なって、たのしくてぇ……っ♡わた、わたし……しあわせです……っ♡せんぱいがぁ、えっちで……よかったです……っ♡うれしいです……っ♡せんぱい、おとこのこに、うまれてきてくれてぇ……ありがとうございます……っ♡えっちさんで、しあわせです……っ♡」

呂律の回らない舌で、彼女は――

自分を強姦してくる男子生徒に、感謝を告げてくるのだ。

合意があれば、あなたには止まることが出来ない。財布の中に入れてきたコンドーム。「高校生はそうするべきだ」と思っていたので、ただ、お守り代わりにしていただけなのだが――「だ、だいじょうぶです、せんぱい……っ♡きょう、あんぜんびですし……っ♡びゅーびゅー……っ♡はじめて、なので、なかだしがいいです……っ♡なかにだしてくださぁい……っ♡」と誘惑をされれば、結局の所は蓮の思うがまま。あなたは彼女に背後から覆い被さり、膣内射精をぶち決めて――

そうして、この交際関係は始まったのだ。

――

「先輩はさぁ、ムラムラしたら、正直に言ってくれるし……っ♡したいプレイも、やりたいシチュも正直だからね……っ♡私、すっごい嬉しいんだけどぉ……ねぇ？今、何考えてたの？」

黒嶺蓮は、上目遣いであなたに尋ねてくる。

普通のカップルならば「な、なんでもないよ」と頬を赤らめながら、照れ隠しに頭でも撫でるのだろうが――あなたには、それを許されていない。彼女が望んでいる世界を実現するために、あなたは彼女の胸を揉み揉みと掌で鷲掴みにする。８８センチのＦカップ。大学一年生で、それだけのサイズがあり、ウエストはくびれて尻が大きな少女というのはきっと、グラビア界やＡＶ界は放っておかないのだろう。

「……えっちなこと？……ふぇっ？あ、あはは……っ♡

私との……初体験、思い出してたの？」

あなたの発言に、蓮は頬を赤らめて視線を逸らす。

彼女が夢見ていた「自分に嘘を吐かないでくれる、白馬の王子様との素敵な恋愛」は――告白をして、たったの五分で打ち砕かれたのだ。そこで抵抗をしていれば悪い夢かも知れないが――元々、ドスケベな身体つきをしている蓮が、性欲旺盛でないはずがないのだ。あなたよりも、むしろ彼女がドハマりをして――、当時二年生だったあなたは、卒業するまでの二年間――学校行事の体育祭や文化祭や夏休みや冬休みや修学旅行や卒業式を思い返しても、その全てにドスケベでハレンチな思い出がついてまわったのだ。

「むぅ～……先輩が悪いんだよ？私は……えっちな先輩に犯されちゃった被害者……って、わけでもなくて……うぅ……か、加害者だよ……っ♡いっぱい逆レイプしたよ？……全部、ぜ～んぶ合意の上だけどぉ……うぅぅ～……な、なんか先輩ずるい……言わせてる……っ♡」

勝手に発言をして、勝手に墓穴にハマるのが黒嶺蓮だ。

性欲旺盛な男子中学生が、毎日数回の自慰行為を行い、街中で異性を見れば、乳房や臀部の膨らみを視線で追っ掛けて、他の誰かセックスをしたと聞けば焦燥に駆られて、テレビのニュースで芸能人の懐妊を聞けば「中出しセックスをしたのだ」と考える――

その性欲が、そっくりそのまま黒嶺蓮の性欲なのだ。

真面目な彼女は性欲が絡まなければ清楚で優秀な娘なのだが――、その性欲がムラムラと積もれば、あなたが発散をさせてやらないといけないのだ。あなたのことを大好きでたまらない美少女が、自分自身をはしたないと思うほどにドスケベというのは――男の子にとっては夢のようなもの。あなたは、蓮の乳房を服の上から撫でてやる。タンクトップの下のそれは、夜用のナイトブラ。分厚い布地越し

には乳首が感じ取れないので――
”ナイトブラを外して、乳首をこねこねしたい”
と、あなたが告げると――
「……ん～っ、いいよっ♡」
黒嶺蓮はタンクトップの内側に手を回して、ブラジャーのホックに手をかけるのだ。
あなたの性欲を正面から全てをぶつけても、彼女は受け入れてくれるのだ。”ついでに、そのナイトブラの匂いを嗅ぎたい”と言うと「え～……っ♡は、恥ずかしいけどぉ……それで、ちんちんパキパキになるの？」と彼女は尋ねてくる。”元から最大硬度なので、これ以上は硬くも大きくもならない”と告げると――「……わ、私ね？本当に恥ずかしいんだけどぉ……でも、それ以上に……先輩が私の体臭に夢中なのね、すっごく好き……っ♡」と上目遣いであなたを見つめて――分厚いナイトブラを手渡してくるので、あなたはそれに顔を埋めてふがふがと臭いを嗅ぐ。どこかミルク臭さを感じさせるそれは――お風呂上がりの蓮の甘酸っぱいフェロモンが凝縮されているもの。マスクのように口元を覆い、深々と呼吸をすると――
「ううう……っ♡」
と、唸り声を上げながらも、蓮は嬉しそうだ。
あなたは、彼女の身体を抱き寄せる。
画面の向こうの映画では――相思相愛になったカップルが、同じようにソファに横並びになって映画を見ている。主人公がヒロインと手を繋ごうとして、手の甲を指で触った瞬間に、びくっと逃げて

――業を煮やしたヒロインが、主人公の手の甲をぎゅっと鷲掴みにするシーンであり――
”くにくに……っ♡しゅりっ♡しゅりり……っ♡こねっ♡くに……ぐにに……っ♡”
「あふっ♡んん……っ♡あっ、せん、ぱい……っ♡それ……すき、です……っ♡こねこね、されるの……っ♡あふっ♡んん～……っ♡は、はい……っ♡ちくび、びんかんなので……ちょっとつよくても……しあわせ、ですっ♡」
あなたは、その初々しいカップルを眺めながら――
タンクトップ越しに、蓮の乳首をこねこねと愛撫するのだ。
少し大きめで、桃色が艶やかな蓮の乳首。普段から彼女は、そこを触って自慰行為をするらしい。ドスケベな少女が自ら開発した性感帯は、あなたのテクニックでも簡単に快楽を与えることが出来て、機嫌を良くしながら、あなたはそこを徹底的に責め上げる。
”しゅりしゅり”と布地越しに乳首を愛撫されるのは、直接の刺激とは違った快楽があるらしい。
あなたは、彼女の真っ赤になった耳を”はむっ♡”と甘噛みしてやる。本気で嫌ならば、蓮は自分の気持ちに”嘘を吐かず”に素直に言えるのだ。「やぁ……んん……っ♡」というそれは、否定ではなくただの嬌声。自分の指で、黒嶺蓮のような美少女が、激しい快楽を抱いているのだ。
やがて――
あなたがタンクトップの腋から手を挿入して、乳首を”きゅっ♡”と抓ると――
彼女は肩を”びくびく～っ♡”と弾ませて、軽い絶頂を迎える。
「はぁ、はぁ……っ♡んっ♡先輩って……ほんと、女の子いじめるの好きだよね……っ♡先輩にいじ

められて……どんどん、女の子として弱くなっちゃうよぉ……っ♡他の男子に誘われても……拒めないくらいに……んふふっ♡」

にやにやと笑みを浮かべて、彼女はあなたを挑発する。

それが嘘ではない――と、嫉妬をしたのは昔の話。

彼女が思い浮かべている”他の男”が、あなたの分身であればそこに矛盾はないのだ。

黒嶺蓮も１９年間、自分の体質と無駄な時間を過ごしてきたわけではない。

あなたを挑発して、誘惑する術は幾らでも持っているので――

あなたは、彼女の手を掴み、自身の股間に触れさせる。

”バッキバキに勃起したちんぽは、今の蓮の言葉にたまらなく興奮をしている。蓮が他の男に抱かれることを想像すると、それは死ぬほど辛いものであり、雄の生存本能が子孫を残さねばならないと激しく昂ぶっているのだ。今日が安全日だから、そういうことを言ってもいいけど――危険日だったら、お前はマジで孕まされてるんだからな？雄の性欲を馬鹿にするなよ？俺は今すぐにでも蓮を孕ませたいし、蓮の赤ちゃんが欲しいし、蓮が望むならその日に大学を辞めて働きに出て結婚するんだからな――”と。

あなたは、黒嶺蓮に自分の本音を告げるのだ。

喋るのは苦手であり、大勢の前で口を開けば変な空気になるのがほとんど。「しゃべりが得意な人

間」がいるのだから、その反対もいるわけで、あなたは「背が低かったり、足が遅かったり」と同じ程度の個性だと思っていたのだが――

「ひゃ……ひゃい……っ♡」

どうしたことか――

二人きりならば、問題なく喋ることが出来るのだ。

蓮は頬を真っ赤に染めて、瞳には僅かに涙を浮かべている。自分の軽い挑発で、あなたが怒ったと思ったならば――それはあなたにとって不本意。蓮を溺愛しているあなたにとって、彼女に何か一つでも怒りを抱くはずがないのだが――

「先輩って、そういうとこありますよね……っ♡」

あなたは――

ぽんぽん、と自身の膝を叩く。

男女を逆にするのが普通なのだが――

蓮は、勢いよくあなたの膝に倒れ込んで、そこに頭を乗せる。

膝枕の体勢で、あなたは彼女の頭を撫でてやる。

蓮のすべすべでむちむちな太腿ならば、枕にしたい気持ちもわかるが――あなたの太腿は当然硬く、毛も生えている。何がいいのかはまるでわからないのだが――蓮はそれに満足であるらしい。ぷにぷになほっぺたで、あなたの毛が生えた太腿に頬ずりをする彼女。乱暴にわしゃわしゃと頭を撫でるそれは、風呂を終えた恋人には相応しくなく、毛の長い大型犬用なのだが――「もっと、もっと」と催

促をするように蓮は、あなたの太腿に頬ずりを繰り返して――
「いひひ……っ♡」
”ごろん”と寝転がり――
あなたの勃起した逸物と、正対する。
「えへへ～……っ♡先輩、私……これ好きだよぉ……っ♡先輩のパンツ……っ♡トランクスより、やっぱりこっちだよねぇ～……っ♡」
ボクサー型の下着は、トランクスとは違い肌にぴったりと密着する代物。
ブリーフほどの締め付けでもなく、あなたはそれを気に入っていた。
トランクスならば、ちん先から残尿が漏れれば太腿を汚すリスクはあるのだが――
ボクサーパンツであれば全てが布地に給水されていく。
だが、当然そのデメリットもあるわけで――
ボクサーパンツであると――
鈴口から溢れたそれが、布地に染みこむのだ。
股間を外敵から守るために、下着が存在するのならば――その汚れは何も忌むべき存在ではないのだ。下着は役割を果たしたと、褒めて讃えられるべきなのだが――汚れた下着は指先で摘まれて、洗濯機に放り投げられ、さながら汚物のように扱われるのだ。あなたの感じている理不尽は、特別に大きなものではなく、他人様にわざわざと披露するものでもないのだが――
「えへへ……おパンツくん、今日もお疲れ様……っ♡」

”はむ……っ♡”
と――
蓮は、あなたの肉棒を下着の上から咥えるのだ。
”はむはむ……っ♡れろれろ～……っ♡じゅるるる……っ♡はむ……はふ……っ♡”
「んふふ～……先輩……これ、ほんと好きだよね……っ♡」
自身の肉棒を、彼女は下着越しにパクッと捕食をするのだ。
普段の彼女の口淫の淫らな舌使いとは異なる――さながら、何でも口に入れたがる幼児のような態度。あなたの肉棒は、いつもとは違う微弱な快楽に悶えることになる。
奇しくも、先ほどのタンクトップ越しの乳首責めと同様な代物だ。
直接刺激されるよりも、布地越しに刺激される方がじんわりと、深い快楽が響いてくるのだ。
絶頂や射精をするほどの激しさはないが、代わりに、永遠に続けられそうな代物。
あなたは、蓮とは違ってまだ風呂には入っていない。
映画を見てからお風呂に入ればいいという彼女の言葉は――あなたが一日過ごした汗や体臭を楽しみたいがための代物。嘘を吐けないので、あなたも彼女も互いの体臭が大好きであることはバレバレだし、一日を汗だくで過ごした後の腋や股間に顔を埋めたいのだが――
一方で、それを恥ずかしいのは、互いに同じなのだ。
いつも最終的には、「私は女の子だから」という理由で蓮は一方的に身体を洗い、あなたにフローラルな薔薇の香りを堪能させてくるのだが――

「……ふぇっ？……もう、先輩……
汗じゃなくてぇ……メスのフェロモンの匂いですが……？」
今の蓮は――
濃厚な雌の香りを、むわむわと漂わせているのだ。
むっつりドスケベで発汗が多い体質の彼女であり――風呂上がりだというのに、すっかりと雌の匂いを漂わせている。嗅いでいるだけで、海綿体が刺激されて肉棒が隆起する代物。
しかも――
黒嶺蓮は、あなたのボクサーパンツの膨らみと――
先端に染みこんだ、小便と我慢汁の染みを啜っているのだ。
カップうどんの”お揚げ”に汁を染みこませて、お行儀悪く啜るのが大好きな少女。普段のそれですら、蓮の最高すぎる顔面があれば「下品」ではなく「うっわ……めっちゃ無邪気で可愛い……」となるのに――
今の彼女は、それをあなたのパンツで行っているのだ。
隆起した膨らみの、先っちょの染みを咥え込んで、じゅるじゅると音を響かせながらあなたを見つめる蓮。蒸気で噎せ返りそうなほどに、熱と汚れを帯びているあなたの肉棒なのだ。汚物の扱いに慣れている看護師や介護士ですら、素手では触るのを拒みそうなそれを――
蓮は、最高の飴玉を堪能するように夢中になって啜るのだ。
やがて彼女は――

”ぷはぁ♡”
と、唇を離す。
「ほらほら、先輩……っ？可愛い彼女にどうしたいの？」
あなたを上目遣いで見つめて、何かを尋ねてくる彼女。
片手は既に、自分の秘部をなぞっている。自慰行為をしながら、大好きな雄のパンツを吸い――更には、あなたに命令をさせたいのだろう。蓮の頭を撫でてやり、彼女の乳房に手を這わす。極上の柔らかさを持つ媚体は、全てあなたの思うがまま。危険日に押し倒しても、受け入れてくれる可愛い恋人がいるのは――世界中の雄の全ての幸運を集めても、敵うことがない代物であり――
”〜〜〜〜っ！”
あなたが、彼女に命令を下すと――
「……ふぁいっ♡」
蓮はにっこりと笑みを浮かべて――
それから、あなたのパンツを口だけで脱がせる。
あなたの協力があっても簡単な行為ではないのだが――蓮はそれを、幾度となく繰り返し行ってきたのだ。容易く、あなたの下着を脱がせて下半身の肉棒を露わにする。
「……先輩の、先っちょの皮を被ったこれ……ふふっ♪私、大好きですよ……っ♡……本当ですって、先輩……っ♡私のこと……先輩が一番知ってますもんね？」
彼女の言葉に、当然、嘘はない。

あなたの肉棒は先端が包皮に包まれた、仮性包茎。
男の子にとってはコンプレックスを刺激する代物であり、彼女に出会う前は「夏休みの間に、手術すべきだろうか」なぞと考えたこともあったのだが――
”はむ……っ♡れろれろれろ……っ♡むちゅっ♡あみゅ……っ♡ちゅ～……っ♡”
あなたの最愛の恋人が――
その仮性包茎を好きだと言ってくれるのならば、皮を切除する理由はないのだ。
普通の女子であれば、仮に好きであったとしても口にすることは拒まれる「男の子の汚れ」でも――黒嶺蓮には、それを誤魔化すという選択肢はないのだ。あなたにドン引きされることを覚悟で彼女は「皮を広げて、中に涎を垂らして、舌をねじ込んで亀頭をぐるぐると舐め回すことが大好き」と暴露をしたのだ。舌先に積もった亀頭の汚れを、もぐもぐと咀嚼して、ごっくんと飲み込んで――空っぽになった、マーキング済みの口を”んあ～っ♡”と見せつけたがる蓮。彼女のような少女は、嘘を許容できる世界で生きていれば間違いなく、世界中の雄から一番優秀な人間を選べたのだろうなと考えているのは――
「ろうれふか……っ♡ふぇんぱい……きもひいいれふか……っ♡」
蓮のフェラチオが、極上すぎて――
意識を紛らわせないと、即座に射精してしまいそうなのだ。
彼女と出会ってからの三年、あなたと彼女は一週間以上の間隔を空けて、身体を重ね合わせなかったことはないのだ。性欲旺盛な蓮にとっては、あなたの肉棒の弱点を知ることは絶対条件。あなたの

弱いところを知れば、あなたとのセックスを長く、多く楽しむことが出来るわけで――

あなたが絶頂する、ギリギリ手前の弱点を責めることはお手の物なのだ。

裏筋を丁寧に舐め回し、亀頭に吸い付いてくる彼女。カリ首の傘の裏は激しく、しかし、絶対に傷つけないように舌先で小刻みに舐め回してくる少女。あなたの肛門を舐め回すことに躊躇を抱かない少女の、情熱的な奉仕は――すぐに、あなたを限界に導くものだ。

「ねぇ……先輩？

今日さ……悠樹くんと会ってたでしょ？」

蓮は――

あなたを見上げながら、首を傾げて尋ねてくる。

互いにセックスをやり過ぎた為に――会話をしながらでも、舌の動きに集中することが出来るのだ。だが――それは飽くまで、彼女がフェラチオでは「奉仕をする快楽」しか与えられないからこその余裕であり――彼女に快楽を注ぎ込まれている、あなたは違う。

蓮は、嘘を見抜けるのにもかかわらず――

嘘を絶対に吐けない状況で、あなたに尋ねてくるのだ。

彼女のお気に入りのそれは、優しさなのか厳しさなのか、あなたにはわからない。蓮はあなたの陰嚢を”ずずず～……っ♡”と、餅を吸う勢いで頬を窄めて吸いつき、あなたは”びくびく……っ♡”と、足の爪先を伸ばして快楽に悶えるばかりだ。

「学食で偶然、見ちゃったんだぁ……っ♡ねっ、知ってるよね？

私が……悠樹くんに、何回も告白されてるの……
……別にね、いいんだ、それは……私が揺らがなければ……
私が先輩を好きなら、百万回告白されても寝取られるつもりはないし♡
……でもでも、先輩？
悠樹くん、先輩のこと……あんまり好きじゃないでしょ？
……ねっ、何の相談してたの？」
蓮に尋ねられて――
あなたは、無言で彼女の瞳を見つめる。
嘘を吐けないあなたは、そうして――
無言で”察してくれ”というプレッシャーをかける他にないのだが――
「……言ってくれないと、イかせないよ？」
あなたの恋人は、その視線を何度も喰らっているのだ。
関係性の薄い相手ならばともかく、蓮はその視線を簡単に跳ね返すことが出来るのだ。
そうすると、今度は追い詰められるのはあなた。
悠樹と、その恋人と出会っていたことは事実。
まさか蓮に見られていたとは、あなたには想像もしなかった代物。だが――彼女に正直に話すことは躊躇われるのだ。少なくともそれは、今のように性欲の渦中で語ることではなく――互いに気持ち良くなり、事後で枕をともにしながら身体をいちゃいちゃと触り合い、ピロートークに耽っている瞬

間だと思ったのだが――
あなたは――
「……スワッピング、って……
彼女を他の男に抱かせて、先輩が他の女子を抱く……ってやつ？」
黒嶺蓮のその視線には、絶対に勝てないのだ。
「悠樹くんの恋人と？……なるほど、ねぇ……♡悠樹くん……そういうの、好きそ……っ♡」
あなたの肉棒を指先で撫で回しながら――
蓮は、上目遣いであなたを見つめる。
「正直に話してくれたね……んっ♡えらいよ……っ♡」
あなたの亀頭を撫で回しながら、蓮は上機嫌。
普通の恋人であれば、自分の知らないところで交換交尾の提案をされていれば不機嫌もいいところなのに――黒嶺蓮にとっては、あなたが嘘を吐かないというだけで最高に幸せなのだ。ここで彼女を慮って「悠樹と会ってなかった」「雑談をしただけ」と、優しい嘘を吐ける人間は――絶対に、蓮に膣内射精を注ぎ込めないという事実。蓮の成長した８８センチＦカップにパイズリをしてもらうことも、頭を撫でられながら授乳手コキをしてもらうことも、対面座位でだいしゅきホールドをしながら、耳元で「しゅき……ですっ♡すきです、先輩……っ♡」と敬語で囁いてもらいながら、尻の肉をめくりあげて肉棒を打ち付けることも出来ないのは――絶対的に理不尽であり――
あなたは、ただ、嘘を吐けないというだけで――

「先輩？正直さんでいてくれた……ご褒美だよ……っ♡」
蓮はあなたに、絶対的な愛情を捧げてくれるのだ。
喉奥まで肉棒を挿入して――激しく抽送をしてくる彼女。
”ぐぶ……っ♡じゅぶっ♡じゅるるる……っ♡ぶちゅっ♡はむっ♡じゅぞぞぞ……っ♡”
頬をべっこりと凹ませて、口腔を擬似的な真空状態にして――
情熱的な、ひょっとこフェラだ。
初めてあなたの肉棒を前にしたとき、彼女はソフトクリームのように舐めるのが精一杯だった。豊富なエロ知識でフェラチオを真似しようとしても、歯を立てて、あなたを傷つけるほどにお粗末であったのだが――
それから、幾度となくあなたの肉棒を咥え込んできたのだ。
デート中でも、互いにムラムラしてしまえば嘘を吐けず――人目から隠れて何度もそれを繰り返してきたのだ。あなたの肉棒を”喉”でシゴきあげることは、蓮には朝飯前。
あなたもやがて、彼女のフェラチオ奉仕を前に、射精が近づく。
肛門に力を込めて尿道の根元をきつく引き締めたところで――彼女の吸引力が、あなたの金玉の中から精液を吸い上げてくるのだ。ソファの背もたれに深くのけぞり、我慢をするのだが――蓮にとってはその我慢が、たまらなく愛おしく感じるのだろう。あなたが彼女と性行為をするときに、蓮が絶頂を耐えている姿を見れば、あまりにも可愛いその姿にわざと意地悪をしたくなって、激しくするのと同じで――蓮の吸引力も最高潮を迎える。

学校中の人間が憧れていた――清楚な美少女が、黒嶺蓮だ。
他人の嘘が苦痛な彼女は、他の誰かと深い関係を築くことは滅多になかった。科学的には絶対に説明の出来ない、嘘を見抜き、苦痛に感じる能力。他人からの注目を浴びて承認欲求を満たしたいが、何も持っていない人間が「私は霊感がある」と主張をするのと同様な――電波メンヘラバカ女だと思われるのが関の山であり、誰とも深い関係を結んでこなかったのが黒嶺蓮なのだが――
それが周囲の人間にとっては、彼女の清楚性に繋がるのだ。
常に憂いを湛えた瞳で、大空を眺めるのが似合う――深窓の美少女。中学高校と、彼女の同級生達は皆、「黒嶺蓮は、自分の周りのバカ女達とは違い、高潔な少女だ」と思っていたのだろうが――
そんな彼らが――
”大好き彼氏の金玉を空っぽにするために、ザーメンぶっこぬくひょっとこフェラ”を見れば――卒倒することだろう。
あなたは蓮の頭に手を伸ばして、必死に射精を堪えるのだが――彼女は幾度となく、あなたの金玉から精液を絞り出してきたのだ。あなたの陰嚢の裏を爪先でカリカリとくすぐり、上目遣いをされれば――あなたには最早、どうすることも出来ない。”蓮、好き、好きだ、蓮――”と口から出る言葉は、あなたの本能そのままのもの。例えそれが、射精の催促であったとしても、肉体から素直に発せられた言葉というのは、最も嘘からかけ離れた代物。瞳にハートマークを浮かべる勢いで、蓮は激しく肉棒を抽送していき、やがて、あなたと恋人繋ぎで五指を絡めて”ぎゅ～～～っ♡”と深く、それを握りしめると同時に――

”びゅるるるるる〜〜〜っ♡びゅるるるるっ♡どびゅどびゅっ♡びゅるる〜っ♡”
”びゅ〜っ♡びゅっくんっ♡びゅ〜っ♡どびゅどびゅっ♡びゅるるっ♡”
”びゅく……っ♡……どびゅっ♡びゅ〜……びゅ、っくん……っ♡”
”……っ♡♡♡”

あなたは、黒嶺蓮の喉奥に射精をした。

初めての口内射精のときに、彼女は思わずそれを吐き出してしまった。喉奥に叩きつけられる感触に、耐えきれなかったようだが――今の彼女は、違う。喉にまで深く突き立てられた肉棒が、激しく脈動する感触すら、愛おしくてたまらないのだろう。「大丈夫だよ、全部出して」と掌越しに感じる、蓮の優しさをたっぷりと堪能しながら、あなたはだらしなく精液を吐き出していく。

やがて――全てが蓮の口内に吐き出されて――

”んあ〜……っ♡”

「いっぱいでたね……っ♡」

蓮は、口を大きく開けてあなたに精液を見せつけてくる。

彼女の真っ赤な舌に乗った精液は――いつもより濃厚で、ゼリーのように半固形状になった代物。彼女はそれを舌先で攪拌していく。精を吐き出した後のティッシュの火照りや匂いを考えれば、決して、良好ではないはずの味も――あなたが彼女の愛液を甘く感じるのと同様で、蓮にとってはたまらなく愛おしい甘露であるらしい。”ぐちゅぐちゅ……っ♡くちゃっ♡ちゅぶ……っ♡”と下品な水音を響かせながら、やがて――

”ご……っきゅんっ♡”
「……んはぁ……っ♡
全部飲んじゃった……っ♡」
蓮は、喉を鳴らして精液を嚥下して――
再度、あなたに空っぽの口の中を見せつけてくる。
女性としては最低にはしたない行為であっても――そこにいるのは、あなたのことが大好きでたまらない、大型犬のような少女なのだ。ご主人様であるあなたは、彼女の頭を撫でてやる。褒めるような手付きのそれに、蓮は蕩けてしまったのだろう。発情した彼女を鎮めるように、あなたは、彼女を抱きしめたままソファに寝転がり、何度も、何度も舌を絡める濃厚なキスをして――
「……ねっ？先輩はえっちさんだからぁ……
他の女子と、そういうことしたいかもだから……
考えたんだけど……
私……スワッピングはやだ」
彼女は――
あなたの耳元で、ぽしょぽしょと囁きかける。
嘘が嫌いな彼女は他人との会話を、積極的に好むことはない。
だが――
彼女の声は人を虜にする、魔性の代物。

自分が恋人である、というひいき目を抜きにして、女優や声優を志してもプロのそれと遜色がないものであると、あなたはわかっていて――

そんな彼女が、耳元であなたにねだってくるのだ。

「先輩が望むことなら、なんでもしてあげたいけど……他の男子に胸を揉まれて、キスをされて……犯された後でね？いつも通り……先輩とおしゃべりする私は……

きっと、嘘がなくても……耐えられないと思うから……っ♡」

彼女は、あなたの機嫌を取るように耳を”はむっ♡”と甘噛みをして、太腿で股間を撫で回してくる。

あなたがどんな考えを持っていたとしても――「この極上の雌を他の男に抱かせるのは、やっぱりやめた」と心変わりをすれば、そこに存在するのは真実だけだ。媚び媚びで、あなたのことが大好きな彼女としてアピールをし――「他の女の子に目移りしなくても、私がキミを世界一幸せな男子にしてあげるから」と、肉付きの良い太腿や豊満な乳房、真っ赤で長い舌と、全身であなたを幸せにするのだと媚びているのだが――

あなたが彼女に告げたのは――

「……えっ？違うの？……あっ、そっか……なるほどね？

悠樹くんの彼氏と私、先輩と悠樹くんじゃなくて……

……悠樹くんが……私のことを抱きたいんだ……っ♡」

あなたと蓮にとっての幼馴染――

月島悠樹という”女子”が、蓮とのセックスを望んでいる、という話だ。

二章

「つまりだよ？ボクはキミの恋人である黒嶺蓮を抱きたいんだ……あのすまし顔をぐちゃぐちゃにして、エッロいことなんて興味ありませんよ～みたいなツラを……ボクの指使いで、まんこほじくられることに夢中になる、雌猫ちゃんにしたいんだよ……キミ、聞いているのかい？」

ここは大学の学食であり――

周囲には、大勢の学生達がいるのだ。

彼女――月島悠樹の声はひそひそと小さいが、しかし声質と発声がいいので、あなたの耳には透き通って響いてくる。話の内容はとてつもなく下品であるのに――

どうしようもないほどに顔がいいので、あなたは席を立つことが出来ないのだ。

「ああ、ああ――どうして神様は、あの美しい彼女にキミのような凡夫を引き合わせたんだろうね……嘘が存在しない澄んだ心の美男子ならともかく、嘘を吐けない不器用なだけの人間だろ？およそ、地球上で最も蓮ちゃんには相応しくない存在じゃないか、キミは……」

演技がかったように仰々しく、彼女は額を抑える。

悩みの種に事欠かない――という雰囲気だけは存在するのだが、実際の彼女には頭痛の欠片も存在しないはずだ。人間としてどうしようもなく不器用で、嘘を吐けずにだんまりを貫くしかないあなたとは違い――優しい嘘も、酷い嘘も――時には、何の意味もない嘘までペラペラと撒き散らす、口から生まれてきたような女であり――

彼女は目下、あなたの恋人である黒嶺蓮を狙っているのだ。
金髪の彼女は、豊満な肢体をしている。衣服の上からでも、乳房の膨らみが目立つ肉体は――男も女も平等に虜にする代物だ。大きな乳房というのは、人間の本能にとってどうしても抗がえない存在。赤ん坊の頃に、母親に母乳を飲まされながら――あるいは、大声で泣いている瞬間をあやされながら――「おっぱいというのは、僕らの味方だ」と本能に刻み込まれているのが、人間という生き物だ。恋人である黒嶺蓮も、自分より乳の大きな女性を見れば「すごいねぇ……」と感動をして、それは本能的に逆らえないものであり――
目の前の月島悠樹は――
まさしく、黒嶺蓮よりも豊満な乳房をしているのだ。
「ふふっ、ねえ、キミ？……今、どこを見ていたんだい？」
月島悠樹の言葉に――
「……ぷぷっ♪あははっ、キミはほんとに滑稽だなぁ……そうだよな？このでっかいおっぱいだよなぁ……？いやはや、恥じ入ることは何もないさっ♪人間の本能には逆らえないもんなぁ……っ♪
８８センチＦカップの……超超超超～～～顔と胸が良すぎる彼女がいたって……
男に生まれた以上……ボクのおっぱい、揉みたいって思うんだろ？」
あなたは、素直に”おっぱいを見てた”と告げるしか出来ないのだ。
「なぁ、これは悪い取引じゃないと思うんだが？
……ボクに、キミの恋人……

黒嶺蓮を抱かせてくれよ……っ♪」
あなたは――
蠱惑的に笑みを浮かべる月島悠樹を眺めながら――
さて、この心の中にある欲情を、どう処理すべきかと考えた。

月島悠樹は――
あなたと黒嶺蓮の幼馴染だ。
高校時代から、どういった経緯で許されたのかは知らないが、金髪の目立っていた――
所謂〝バイ〟の女だ。
あなたとは同級生で、黒嶺蓮にとっては一個上の存在。大勢の男とも女とも関係性を持ち――時には、教師を相手にすることもあったらしい。トラブルの原因であり、彼女がきっかけで停学や退学に関わった生徒は二桁いる――というのは、あなたの在学中の噂だ。
およそ、あなたのような石の裏のダンゴムシとは関わりの無い存在だったのだが――
「ああっ、蓮ちゃん……今日こそ良い返事を聞かせてもらうよ……？

ボクの彼女になってくれないかい……？」
月島悠樹は――
黒嶺蓮に夢中だったのだ
男も女も平等に虜にして、世界中の人間を籠絡せしめる魔性の魅惑に満ちあふれた彼女にとって――黒嶺蓮という最上級の物件を狙うのは、当然のことだ。普通の男ならば「告白しても勝てないし、釣り合わないから」で半ば諦めて、蓮の肢体で妄想オナニーに耽るだけで満足なのに――
月島悠樹には、黒嶺蓮を落とすに足る魅力と自信が存在したのだ。
『口が上手いし、口説き方も上手だし……
私がこんな体質じゃなかったら、負けちゃってたかも（笑）』と――
蓮が余裕綽々で、あなたとのピロートークで語れるのは――
「他の子との関係？……ああっ、当然さ！キミを彼女に出来るなら、ボクは他の子とはきっぱり別れる！女遊びも男遊びもしない！ボクの全ての愛情を、キミだけに捧げるよ！」
月島悠樹という女が――
どうしようもないほどの、嘘吐きだったからだ。
黒嶺蓮と付き合っても、彼女は他の男や女といとも容易く関係を持つだろう。今まではそれで上手くやってきたし、世間知らずそうな、友達の少ない、バカ女の一匹程度は誤魔化せるだろう。なあに、さっさと抱いてやればちょろいもんだと余裕をぶっこいていたのだろうが――
黒嶺蓮にとって、そのぺらっぺらな嘘吐きは、絶対的な地雷なのだ。

とは言えど、改心をして蓮一人に絞るには――彼女の欲望がそれを許容しなかったらしい。
黒嶺蓮には当時、あなたという恋人もいたし、その告白を丁重に断って――
それから、何度も何度も――
悠樹は、蓮に告白を繰り返したのだ。
「たったの一回でも、首を縦に振れば、この極上のエロ雌を自分のものに出来る」とあらば必死に抵抗をして、何度もトライ&アゲインをするのが普通の人間だ。
男であれば、何度も振られる屈辱に耐えられなくても――
月島悠樹の肉体も精神も、正真正銘の”女”なのだ。
「ほらほらっ、あんなしょうもない彼氏じゃなくてさぁ……ボクの方がぜ～ったい魅力的だよ？ねっ？ボクの方が気持ち良くする自信あるんだけどなぁ……あ～んなつまんない、どうしようもない、何の取り柄もないカスみたいな彼氏じゃなくてさぁ……ボクと遊ぼうよぉ……」
と、悠樹が口説けば口説くほど――
蓮には、どうしようもないほどの苦痛がその身を襲うのだ。
「今日もまた、悠樹くんに告白をされた」とあなたに語りながら――その痛みを癒やしてもらうような逢瀬を交わすのだ。主に――たっぷりと舌を絡ませ合って、前戯で感度を最大まで高めてから――対面座位で抱きしめあって、互いの鼓動を確かめ合いながら、あなたの嘘偽りのない本音を堪能したがる蓮。にゃんにゃんと甘えながら、蓮に積極的に腰を振ってもらえるので――男としては辟易としたが、本音では悠樹のことを嫌いになれず――

一方で悠樹は、あなたのことが大っ嫌い。
黒嶺蓮が、彼女の肉体に相応しいプロ野球選手だとか、ＩＴ企業の社長――つまり、悠樹よりも格上の雄に抱かれるのならばともかく。
そこにいるのは、都合が悪くなったら押し黙って睨むしか能が無い、あなたという三流の雄なのだ。
寝てから言え、とツッコミを受けることを理解した上で――
それでも、月島悠樹にとってそれは寝取られだったのだろう。
自分の最愛の女を寝取る間男を、好きでいられるはずはない。表立って邪険にすれば、益々、蓮のガードが堅くなるのも、悠樹にとってはストレスの一つ。欲しいと思った物は、それが強盗や誘拐であったとしても躊躇わない悠樹であるが――、一方で、蓮が嘘を見抜ける限り、他の男を雇ってあなたを襲わせるわけにもいかないのが、八方塞がりなのだろう。
月島悠樹にとって黒嶺蓮というのは、どんな犠牲を払ってでも手に入れたい女であり――
彼女はそれを手にできないまま、別の大学に進学して――
今年、蓮があなたと同じ大学に入ることを知り、わざわざ編入までしてきた狂人であるのだが――
そんな彼女が――
あなたに”それ”を提案してくるのは、至極、当然の理であった。

「はてさて、ボクは考えたんだよ。キミとは違って聡明な頭脳をしているからね。黒嶺蓮ちゃんは、不本意にもキミのことが大好きであり――

キミがお願いをすれば、つまり、ボクに抱かれるのではないか……とねっ♪」

月島悠樹は、ニヤニヤと笑みを浮かべながらあなたに告げる。

あなたのことを毛嫌いはしていたのだが――「何度も何度も蓮を狙う内に、不思議な愛着も湧いた」というのが彼女の弁。『どうせボクは蓮ちゃんを手に入れるし、そうなったとき、キミは二度と彼女レベルの極上の雌には出会えないだろうし、流石に哀れかなぁ』と事前に、寝取られてしまった敗北雑魚雄のことを考慮しているのは、理解が出来なかったが――元より、精神構造が根本から違う相手なのだ。理解をしようとするだけ、無駄な話であり――

”悠樹がどれだけ言ったところで――自分は、蓮を渡す気はない”と――

あなたにしては珍しく、敵意を露わにして彼女に告げた。

そして――

「ふ～んっ……じゃっ、蓮ちゃんとお茶させてくれるんなら……

パイズリしてやるって言ったら……？」

彼女は――

自身の胸元に指をかけて、あなたに谷間を見せつけてくるのだ。

黒嶺蓮の８８センチＦカップでも十分すぎるほどの破壊力が存在して、あなたは、彼女と添い寝をするときも「むぅ～……触りすぎぃ……」と、頬を膨らまされるほどに、その二つの膨らみに夢中になってしまうのだ。

なのに――

月島悠樹の乳房は、それ以上のサイズ感。

どうしようもないほどにおっぱいが大好きなあなたにとっては――決して、本能的に逆らえない代物。抱かせることを引き換えに、ならばともかく――、一晩、飲みに貸し出すだけで、月島悠樹のパイズリを体験出来るとあらば――

「なぁ？……ボクのパイズリ、やっばいぞ～……っ♪蓮ちゃんみたいなぁ、優しくて清楚な娘が、しゅきしゅき彼氏くんに捧げる、トロットロに甘々なパイズリじゃないぞ？……本気で、雄の金玉空っぽにするための……搾精パイズリ……っ❤泣いてやだやだって叫んでもぉ～……ぜってぇやめたげない……経験豊富のボクのガチパイズリ……っ♪

ちんぽ生やして産まれて……勝てるわけねえだろ、ば～か……っ♪」

あなたは、その欲望に抗うことが出来ないのだ。

口を開けば本音しか漏れないので、あなたは〝むぐっ〟と口を閉ざすのだが――長い付き合いの悠樹にとっては、それも結局は本音がダダ漏れなのだ。ニヤニヤと蠱惑的な笑みを浮かべる彼女。顔が良すぎる――クッソ、この女――男も女も構わないバイとか言いながら、身体つきは純度１００％のエロ雌じゃねえか。なんで金髪を長く伸ばしているんだ。なんだその胸元のネックレス。「谷間を

見ていたんじゃなくて、ネックレスを見ていただけだ」という言い訳を男にさせる為だけの代物じゃねえか――と――

あなたの中の獣欲は、月島悠樹を目の前にムクムクと膨れ上がるのだ。

彼女が曰く、股間にちんぽを生やして産まれてきた男が絶対に逆らえない肉体が――月島悠樹だ。

彼女があれほど多くの人間と関係を持って、未だに刺されていないのもその媚肉のおかげ。「もう一回、月島悠樹に媚び切っていれば、もう一発ヤらせてもらえるかもしれないから」とあれば、男も女も彼女を刺すよりも、必死に給料を貯めてプレゼントをする道を選ぶに違いない。

「なあ、キミ？ボクは考えたんだよ。この明晰な頭脳で沢山考えて、どうしたら、このしょうもない、性欲まみれの、彼女じゃない巨乳で勃起するちんぽ猿が譲歩してくれるか、とね……っ♪

そして、一つの結論に至ったんだ……っ

なぁ、ボクと、スワッピングしないか？」

月島悠樹は――

何が愉快なのか、くすくす笑いながらあなたに尋ねる。

スワッピング、というのは――

所謂、カップル同士が行うパートナー交換だ。

マンネリになった二人が、さらなる刺激を求めて――同様の二人と、男女を交換させて性行為に及ぶ行為。「自分の彼女が寝取られること」と「他人の彼女を寝取ること」が、たった一回のプレイで両方、ともに満たすことが出来るのだ。恋人が他の男に抱かれるのは、嫌なことだが、興奮はするし

――他の男の恋人を抱くのは、１００％興奮しか存在しないのだ。
仮にあなたが、蓮と長年のセックスレスに陥れば――
月島悠樹の、その提案にも乗ったかもしれないが――
”そんなの乗るわけないだろ”
と、あなたはバッサリと切って捨てるのだ。
「ほほう……っ♪まぁまぁ、言いたいことはわかるよ？今日の蓮ちゃんも……し～っかり、雄の匂いがぷんぷんむわむわしてたねぇ……っ❤おんなじ講義取ってるからわかるんだよ……っ♪シャワーを浴びた後に、したんだろ？昨日……いや、今朝も、かな？……雄に愛されて、雄の精液を浴びた匂い……っ❤ああっ、敏感なボクだから気がついただけだよっ♪他の男子は気がつかず……うっわぁ……蓮ちゃんおっぱいでっかぁ……今日も美人だなぁ……な～んて、講義中でもエロ妄想して……ちんぽ膨らませてるだけだからね……っ♪」
あなたの言葉に――
月島悠樹は、少しの動揺も見せることはない。
あなたの否定は、彼女の想定の範囲内のはずだ。
不器用すぎて嘘を吐けず、黙りこくるあなたと対極にあるのが――
ペラペラと器用に嘘を使いこなす、月島悠樹という存在だ。
あの黒嶺蓮をして「嘘さえ吐かなかったら、すっごい良い子なんだけどなぁ……」と言わしめる存在であり、だから――

あなたは、彼女が持っている隠し球を考える。
それは、スワッピングを成立させる何か――だ。
あなたにとって、黒嶺蓮を売るという選択肢は絶対にあり得ない。仮に自分の命が人質に取られたら――まあ、流石に売るかもしれないが、空気の読めない人間なので多分、警察に訴えるだろうし、そうなれば日本の優秀な警察は、悠樹を簡単にお縄にすることだろう。
脅迫が不可能ならば、あなたが「それなら、蓮を抱かせてもいいかな」と思えるほどの材料を手にすることであり――
一方で、そんなものはありえないのだ。
黒嶺蓮というのは、とても優しくて可愛くて、おっぱいの大きくて――
あなたのことが大好きな彼女であり――
そんな恋人を手にした男というのは、実質的な世界の覇者であるのだ。
飴玉を口いっぱいに放り込まれた状態で、別の飴に目移りをすることはない。「それ、彼女に頼めば出来るから」という世界で一番の贅沢を手に入れているあなた。勿論――目の前にいる月島悠樹は、顔が良すぎる上に乳もデッカいので、パイズリをしてほしいか問われれば、嘘を吐けずに黙るしかないのだが――
それにしたって――この女には負けないぞ――
黒嶺蓮は俺が守るのだぞ、と強い決意を固めると――
「そういや……さぁ？

キミって、どういう女子がタイプだっけ？

ああっ、違う違う。蓮ちゃんのことが大好きなのは知ってるよ？……でも、も～っと根源的なとこにあるやつ……僕ちゃんが考える理想のヒロイン、みたいな話でさぁ……幼馴染だから、知ってんだよ？……黒髪ロングで、お嬢様で、男のことなんてな～んにも知らない……世間知らずでおっぱいの大きい女の子……キミ、大好きだったよね？」

月島悠樹が話しているのは――

おそらく、あなたが小学生のときに書いていた妄想ノートの話だ。

大学生にもなれば「誰にだって、触れられたら頭を抱えて泣き叫びたくなる黒歴史が存在する」ということを知っているのだが――それでも、彼女の言葉にあなたの心臓はバクバクと、激しく弾んでくる。子供の頃に、自分の脳内で繰り広げられていた物語を――妄想として、書き連ねたノートの存在。あなたは彼女と幼馴染であり――昔から、他人が触れられたくない領域に、土足で踏み込んでくるのが月島悠樹なのだと知っている。あなたのプライドが、小学生のときに、ぐちゃぐちゃに踏みにじられたことを思い出して――ともすれば、過呼吸になりかねないのだが、必死に堪えた。

「いやはや、何も馬鹿にするわけじゃないよっ（笑）キミが図書館のファンタジー小説を読んで、妄想した、稚拙で恥ずかしい、かっこいい僕様がお姫様を助けていちゃいちゃするハーレム小説なんて……ねぇ？現代でプロの文章でリブートしてもらえば、結構な需要になりそうじゃないかな？」

月島悠樹は、あなたをなおも嘲笑してくる。

小学生が妄想を書き連ねたノートの恥ずかしさを笑えば、「お前だって掘り下げれば、恥ずかしい

過去の一つや二つはあるだろう」とブーメランが飛んでくるのだろうが――月島悠樹にとっては、そんなもの関係ないらしい。やはりこの女は苦手だな、と思っていると――

「久々に実家に帰ってさぁ、読んだんだよ、宿敵の弱点が何か書かれていないかなぁって……あっ、キミの実家だよ？お母さん、あと２０年若かったらよかったんだけどなぁ……じゃなくて、キミの実家で、キミの押し入れからノートを読んでさぁ……

……で、そのヒロインがさっき言った……

黒髪ロングで、おっぱいデッカい、世間知らずのお嬢様なんだよ……っ♪

はてさて、バカにするつもりはないさっ。ボクだって、そんな女いたら大好物だものっ♪……だけど、それはキミの性癖の原点な訳で、ここに何か、キミを落とす手段がないかと考えてねぇ……いっそ、ボクが髪を黒く染めればと考えたんだが、この金髪はトレードマークだろ？それに、蓮ちゃんのために髪を染めるならいいけど、キミのために染めるってのもな～んだか気が乗らないなと思ってねぇ――」

月島悠樹の言葉に、あなたは口を挟む余地が見いだせない。

早口でまくし立てるのに、ハキハキと鋭い滑舌のおかげで、全てが聞き取れるのだ。いつどんなときでも、周りには人だかりが絶えず、クラスの中心になれるような存在。大学を出た後に、雑誌やネットで、良くも悪くも彼女の名前は頻繁に眼にするのだろう、とあなたは思っていたのだが――

「――そしたらね？

……入学式で、キミの理想の女を見つけたんだ～……っ♥」

彼女が――

にやっ、とあなたに笑みを浮かべる。

あなたの心を、一瞬で鷲掴みにする、いたずらっぽい笑顔だ。

あなたには黒嶺蓮という、あなたのことが大好きで、お風呂で身体を綺麗に洗った後ならば肛門も舐めてくれるバスト88Fカップの彼女がいる――

という、ただその一点でどうにか耐え切れたが――

彼女がいない童貞の身であれば、その笑顔の一発で虜になり、あなたは全財産を彼女に捧げたことだろう。

「いやはや、びっくりしたよぉ～っ♪最初に浮かんだ感想は『おっぱいでっかぁ……』でね、新歓コンパでも勿論大人気……っ❤はてさて、あのウシチチ女を彼女に出来れば、バラ色の大学生活は保証されているじゃないかっ♪

だがだが、彼女はどうも男が苦手なんだよ……っ♪

ボクがあの身体なら、男も女も片っ端から食い尽くすんだけどね……どうやら、話を聞くと山奥の、小中高一貫女子校で育ったらしいんだっ♪金持ちのパパが、娘に変な虫をつけないようにする、超絶お嬢様校らしくてねぇ……教師や用務員ですら、男の数は限られてるんだぞ？そんな世界から……一転して、共学の大学……ちんぽバッキバキにして、エッロい女を食いたがる童貞新一年生どもと……この春の時期特有の、浮かれポンチのヤリマンバカ女を狙っている上級生ども……いやはや、あの新歓コンパは楽しかったなぁ～……っ❤」

月島悠樹はそこまで話して、くぴり、とコップの水を飲む。
軽快な話の速度に、あなたは合いの手も質問も許されてはいない。脳に心地よい速度で流れ込んでくる情報量。この女が、悪徳商法の道に進んでいないことを、警察は感謝しなければならないなと思っていると――
「ボク？ボクはね、編入してきたばかりだから、実質一年生だろ？入学生だろ？だから新歓コンパでただ酒を飲むのも、やぶさかじゃないと思うんだよ」
何も聞いていないのに、彼女はなおも言葉を続ける。
「とにかく、その娘は大勢のエロ雄にギラギラと視線を向けられていて……かわいそうだったから、この優しいボクが、月島悠樹様が、慈悲を持ってお家に送ってあげたんだよっ♪……まあ、新歓コンパで、未成年が酒を飲むなんて普通だろう？でもでも、彼女にとってはそうじゃないらしくてねぇ～……お嬢様校に送り込んだ、厳格なパパとママがいるわけだ。写真を撮って、これが親にバレたら不味いだろ～、大学も退学だぞ～って脅してね、うん、その……
まあ、美味しくいただいちゃったんだよ」
”ぶふ……っ！”
と、あなたはコップの水を吐き出す。
激しく咳き込むと、周囲の視線が一瞬だけ向くが――すぐに彼らは、元通り。彼らの冷たさが、今

は何よりの幸い。ポケットティッシュで机を拭うと「やれやれ、汚いなぁキミは」と彼女に言われるが、あなたにはそれどころではない。

確かに、相手も手段も選ばない性的倒錯者であったとは思ったが――

まさか、強姦行為に及ぶとは――

「ごーかん？レイプ？ノーノー、イッツ和姦だよっ♪彼女は、所謂レズビアンでね……同室の先輩が”お姉様”と呼ばれる、そんな山奥の女子校で育ったチョウチョだよ？悪い男に犯されるなら、それは強姦だけど……ボクらは女の子同士でそれを楽しんだだけさっ♪それに、ねぇ？女の子に強姦は適用されないんだよ？知ってた？ちんぽを入れないと強姦じゃないんだってっ（笑）」

彼女のペラペラとした軽薄な語り口に――

あなたは、それでも逃げ出せないのだ。

絶対的に魅力とカリスマを持つ、悪の親玉を前にしたときの一般人がきっと、今のあなたなのだろう。月島悠樹が本気で話術を駆使しているのだ。「あなたを逃がさないために」と、最後の一線は越えないように調整しているだろうし――更には「あなたが耳を塞がないように」ということも、考慮されているに違いない。

「まぁ～……ボクも、決まった彼女を作る気は無いんだよ。本命は一人だからねぇ。ボクが初めて出会ったその瞬間から、びび～っと雷に打たれて、恋に落ちた……どこかの冴えない三流男子にダマされて、仕方なく、付き合っている女の子……っ♪あの娘の前ではみ～んなお遊びなんだけどさぁ……

ほらっ、その、食べちゃった子……結構ガチガチな家で育ったから……

本気になられて、めっちゃめんどいんだよ……」
”最低だな”と――思わず、あなたは口を衝いて出る。
月島悠樹にとっては、あなたの返答は「話にのめり込んでいる」という証拠であるので――
更に、不愉快な笑みは加速度的に増していく。
「でもまぁ、顔はさいっこうに可愛いし～……身体もやばいんだよ？マ～ジで……他の女に行けなくなるレベルで～……ボクも、キープはしときたいんだよ。セフレとしては最高の女だからさぁ～……で、だ？ここから本題……
……その子ね、多分、キミの性癖ドストライクなんだよ……っ♪
キミが蓮ちゃんのことをどれだけ好きでも――ボクが、蓮ちゃんの何もかもがドストライクでぜ～ったいに孕ませるって決意してるのと、おんなじ……っ❤多分、蓮ちゃんにも同じような男はいるよ？それが二次元か、現実のアイドルか俳優かは知らないけどぉ～……
人間として生まれた以上ね？どうしようもないほど、抗がえない、直感的な本能で……
自分のドストライクな異性ってのは、いるもんだよ……っ♪
あ――っ、きたきた……っ❤」
彼女は――
あなたの背後に向けて、ぶんぶんと手を振る。
振り返っていけない――
と、あなたの身体は硬直するのだ。

ホラー映画の演出とは違い、そこにあるのは理詰めの理解だけ。月島悠樹はあなたの恋人を狙っており――それを手に入れる為の疑似餌として、一人の女を口説いたのだ。それは――あなたが本能的に逆らうことが出来ない女、ということだ。嘘を吐けないあなたにとっては、”それ”と目を合わせて会話をすれば、全てが終わってしまう。自分の恋人が、初対面の新入生の女の部屋に上がり込んで、処女を食い散らかす最低の女に食われてしまうわけで――

ホラー映画よりも、よっぽどホラーであるのに――

「……お待たせしてしまい、申し訳ございません……悠樹さん……」

背後で響く、彼女の声色は――

あなたが、子供の頃に妄想をしていたお姫様なのだ。

当時は何かのアニメで見たキャラクターの声色を、脳内で再生させていただけであり――だから、彼女も声質がその声優に似ている、というだけの話。妄想の具現化という、ライトノベル的な展開は、この世界の主人公である月島悠樹には存在をしても、あなたには存在はしないわけであり――

「……紹介するよ、黒川白雪さん……っ♪

ボクとキミの一個下で……蓮ちゃんの同級生だねっ♡」

彼女――

黒川白雪は、月島悠樹の隣に座る。

鴉の濡れ羽色――とでも呼ぶべき、つややかで、あでやかな黒髪ロングの――美少女だ。

目尻が少しつり上がっており、普段は厳しそうなイメージが出るのだろうが――

今の彼女は頬を真っ赤に染めて、顔をうつむけて机の天板を眺めているのだ。
大きく豊満な乳房が”乳袋”として浮かび上がっているのは、その服が立体裁断のオーダーメイドだから、なのだろう。自身の乳が大きいことに、ブラジャーにのみならず、衣服に金を使えるというのは――ただのそれだけで、彼女が、超お嬢様校のご子女であることが計り知れて――
あなたの勘違いでなければ――
「……そうだよっ♪黒川さんは、あの”クロカワ”の経営者一族なんだよ……っ♪」
彼女の実家は、日本を支えている超大手企業――
現代における財閥とも呼ぶべき、【クロカワ】なのだろう。
何をやっている会社なのか、実はあなたも詳しくは知らない。初代は明治時代に海運業として名を馳せたらしいが――そこから多くの企業に合併と買収を繰り返していき、クロカワグループというのは、日本国民において名を知らない者がほとんどいない存在。毎日のようにテレビで関連企業のＣＭが流れて、番組のスポンサーでも頻繁に名前を聞き――
言ってしまえば、超上級国民のご子女であるのが――
「は、はじめまして……っ、悠樹さんから話は聞いています……
黒嶺蓮さんの……恋人、なんですよね……？」
目の前の、黒川白雪という女なのだ。
「……うわうわっ♪キミィ、少しくらい視線を誤魔化したまえよ……っ♪

こ〜んな大きなおっぱいの……お嬢様を目の前にして……
パ・イ・ズ・リ♪……してもらいてぇ〜って思うのは、当然だけどさぁ……っ♥」
悠樹の言葉に、あなたは慌てて”バッ”と視線を逸らす。
女性の大きな乳房を見つめないように、という最低限の紳士的対応が存在しても――
その最低限を、圧倒的な破壊力で叩き潰すのが、黒川白雪の豊満な乳房だ。
あなたが今まで見てきた、どんなグラビアアイドルやＡＶ女優よりも圧倒的に大きいそれは――
股間にちんぽを生やして産まれてきて、見るなという方が無理な話だ。
まずい、想像以上だ――小学生のときの妄想を超えてきた、とあなたは身構えるのだが――
”ばっ！”と、自身の胸元を手で隠すのは白雪も同じだ。
「……っ！」
小中高一貫の、お嬢様校で育った彼女にとって――
男の性欲というのは、唾棄すべき存在なのだろう。
彼女の身を慮れば、自分の今の反応は最低だったなとあなたは強く後悔をする。ここに蓮がいれば、彼女は激昂することも、声を荒げることもなく、淡々とあなたに説教をするだろう。怒るのではなく叱る――女の子の胸をジロジロと見たらダメだよ、という、子供に言い聞かせるような説教は、あなたの身に最も辛いものなのだが――
「……なぁ？
胸、隠してもいいって、ボクが言ったっけ？」

悠樹は――
隣に座った白雪を一瞥ともせず、告げるだけで――
「……も、申し訳ございません……」
白雪は――
”す……っ”と、胸を隠していた手を下ろすのだ。
唇をギュッと噛みしめる彼女を、あなたは視線の端で眺める。正対すれば、どうしたところで胸は見てしまうのだ。首を95度に横に曲げた過剰な反応であり――「……ほらほら～っ♪キミには怒ってないんだから、ねっ？……ボクらのこと見てくれないと、寂しいなぁ～」と悠樹に促されて、ようやく、あなたは彼女達と向き直るのだ。
「こいつ、バカだからさぁ～……ボクの言うこと、聞かないのが多くて困るんだよねぇ～……っ♪ほらっ、ジロジロ見てもいいんだよ？……このデカパイ……っ♪おっきいよねぇ？やわっこくて、すっごく気持ちいいんだよ～……っ♥」
悠樹は、隣に座った白雪の乳房を――
鷲掴みにして、あなたに告げるのだ。
「も、申し訳ございません……悠樹さん……っ」
「謝ってばっかりなんだけどさぁ……ほ～んと、物覚え悪い女って嫌いなんだよね～……っ♪それに比べて、蓮ちゃんって頭もいいしさぁ……彼氏と同じ大学に行くために、志望校のランク落とすんだよ？ボクさぁ、そういう献身的なのすっごい好きなんだよね～……っ♪こいつみたいに……バカが賢

い振りしてるんじゃなくて……賢いくせに、バカに合わせられる女の子……
キミも、いいと思わない……？」
”ぐに……っ❤もにゅっ❤むっに～……っ❤ぐにゅっ❤むち……っ❤”
あなたは――
”おっぱいに夢中で、何も話を聞いていなかった。もう一回言って欲しい”
と――告げる他になかった。
白雪は、あなたに睨むような視線を向けてくるのだが「あははっ♪馬鹿正直だなぁ……っ♪」と、悠樹は上機嫌の様子。衣服の上からでも、指の痣が残りそうなほどの力強さ。あなたの最愛である蓮に同じ力を加えることは――あなたには出来ない。彼女はそれを受け入れてくれるだろうが――芸術的なまでに美しい、透き通るほどに真っ白な乳房のキャンバスに指の痣を残すのは、あなたの精神が耐えられないからだ。
それでも、月島悠樹にとっての黒川白雪は、大勢のセフレの内の一人に過ぎないのだ。
更には、この関係性を保ちたいのは――
悠樹ではなく白雪の方なのだ。
「ねぇ、キミ？ボクは考えたって言っただろ？
黒嶺蓮が首を縦に振るのは……だいしゅき王子様のキミの提案だけで……
キミは、今……この女に興奮してるだろ？
ああっ、勿論それは秘密にしてもいいさっ♪蓮ちゃんは思い込みが激しいからねぇ。それに……ど

うせ、嘘は吐けないんだろ？彼女には……
キミは今、本能で……
この雌と……ヤりたいって思ってるんだから……っ」
「……っ♡♥」
黒川白雪は――
今にも泣き出しそうな瞳で、あなたを見つめてくる。
彼女がレズビアンである理由を、あなたは知らない。
生まれついての性的願望であるのか――それとも、男性と隔離された世界で生きてきて、それが当然だと思い込んでいるからなのか。性的自認というのは、簡単な話ではない。あなたの欲望のままに、何か一つでも、結論を下してはいけないと――
理解は、してるのだが――
「レズビアンの……乳がでっけえ、生意気なお嬢様……
ちんぽでぶっ潰してえよなぁ～……っ♪」
月島悠樹の発言に――
あなたは、一つとして反論が出来ず――
それ、でも――
蓮を裏切れず、初対面だが、白雪を傷つけないために――
”めちゃくちゃヤりたいけど、我慢する――”と、言いかけたところで――

”すちゃ……っ❤”
悠樹は――
「ほらっ……見てよ、これっ♪」
「――ゆ、悠樹さん、それは……っ！」
「じゃじゃ～んっ❤」
彼女は――
あなたに、スマホ内の写真を見せつける。
一人の少女が――
いわゆる”事後”になっている場面だ。
一糸まとわぬ全裸になり、身体中には途方もないほどの汗をかいている。スマホの画面越しであっても”むわっ❤”と熱を感じるほどであり――その乳房は圧倒的な質量と体積を持っている。恋人である、８８センチＦカップのグラドル級ボディのそれとは、比較にならないほどの――圧倒的なデカパイ。洒落や冗談、比喩表現ではなく「日常生活を送るのが、困難になるサイズ感」であり――自分の足下すら見えないようなデカ乳の女が――
膣をぐちょぐちょに濡らして、顔を隠しているのだ。
ベッドのシーツが、おねしょの勢いで濡れており――口元からはだらしなく涎が溢れている。飛び出た舌は、子猫のように元に戻らないのだろう。全身の筋肉がだらしなく弛緩して、大股を開いて、ひたすら性行為の余韻に浸っている姿は――

「黒川白雪ちゃんのぉ～……ハメ撮り写真で～すっ♪」
悠樹の言葉に、白雪は恥ずかしそうに視線を伏せて――
”ごくりっ”と、あなたには唾を飲み込むことしか出来ない。
「……ボクが蓮ちゃんとヤれるんなら……キミには、ボクの白雪貸してあげるっ❤ＮＧプレイは勿論、な～んもないよ？アナル舐めもいいし、おしっこ飲ませてもいいし……なっ、いいよな？」
「……は、はいっ♡❤……悠樹さんの、命令なら……」
「……ピルは飲ませるけど、中出ししてもＯＫだし……あっ、順序逆でもいいよ？危険日の子宮に……生で中出しした後に、アフターピルを飲ませるのでも……っ♪万が一孕んじゃったらぁ……それはそれでＯＫだよ？白雪は、ボクにクロカワグループ捧げてくれるから（笑）キミはぁ、年商数兆円の逆玉の輿乗ってもいいんだよ～？」
悠樹が提案したそれに――
果たして、この世に一人でも逆らえる人間はいるのだろうか。
男嫌いのレズ女を、肉棒で組み伏せたいという欲求。
勿論、それを表立って口にすることは出来ないが――それは飽くまで、脳内の理性による代物。
「やったらだめ」と「やりたくない」はまるで別の話であり――
白雪も、半ば強引な形ではあるが同意をしており――
あなたは――
蓮を、悠樹に一晩抱かせるだけで――

その最上級の媚肉を、貪ることが出来るのだ。
もしも――
あなたに器用な嘘が吐けるなら、それを断っていただろう。
黒嶺蓮を奪われるリスクが、ほんの一％でも存在するならば、あなたは絶対にその提案に乗らないはずだ。「バカにするな」「見くびるな」「俺は蓮を愛しているし、他の女を抱く気は無い」と一喝して、それで終わりで良かったのだが――
あなたには、嘘は吐けないのだ。
スマホの中のハメ撮り写真。黒川白雪が淫らに感じまくって、雌としての快楽を堪能している姿。彼女は手指や舌で全身を愛撫されても、まだ、雄の肉棒というものは知らないはずだ。山奥の超お嬢様校で育った、箱入り娘のまんこに、初めて勃起ちんぽをぶち込める男が自分であって――興奮をしない、なんて言う男がいれば、そいつは黒嶺蓮が死ぬほど大嫌いな人間なのだ。
「何も難しいことはないだろ？キミは……蓮ちゃんに聞けばいいんだっ♪スワッピングがありかなしか……っ❤なしって言われたら、残念だけど、今回は諦めるよ……よかったなお前、そしたら、男に抱かれなくて済むぞ……っ♪」
「……わ」
「わ？」
「私は……蓮さんの、彼氏と……つまり、あなたと……その……
ヤ、ヤりたい……ですっ♪」

黒川白雪は――

そのまま、あなたに頭を下げる。

長い黒髪が、机にぺたりと乗るほどの深々としたお辞儀であり――両手は膝の上で指先まで揃えられている。豊満すぎる乳が”むにっ♡❤”と机の上に乗り、形を歪めるのは――

おそらく、彼女がノーブラだからだ。

「ど、どうか……私の、男嫌いの……レズビアンの、黒川白雪の初めてを、奪って……っ

……私のこと……女の分際で、男性が苦手な私のことを、矯正……

躾けてくださいませ……ご主人様……っ♡❤」

黒川白雪のその宣言は――

他の誰かに聞かれれば、あなたの破滅に繋がるのだ。

法学部ではないので難しいことはわからないが――それでも、これほどまでに超金持ちのお嬢様の極上の美少女に、頭を下げさせて性奴隷宣言をするのは――

間違いなく、何らかの法律に抵触をするのだ。

「……ほほうっ♪お前、そんなにこいつに抱かれたいんだ～？……雄としては、しょっぱいよ？大したことないよ？ちんぽも仮性包茎だし……」

「……ほ、ほーけーちんぽ……だい、大好きです……っ❤」

「ほんとに？チンカスいっぱい溜まってんだよ？金玉もぎっとぎとに脂ぎってて～……っ♡くっさいちんぽこしゃぶりたいの？」

「は、はい……っ♡♥白雪の……お、お口に……おちんぽ、ぶち込んでください……っ♡♥」
「うわうわ～っ♥めっちゃ良い子じゃ～んっ♥」
悠樹は、今にも泣き出しそうな白雪の頭をわしゃわしゃと乱暴に撫でる。
ストレートな黒髪は、一本一本が線の細い代物であり、悠樹の手付きは恋仲であっても地雷になりかねないのだ――
「……っ♡♥」
白雪は、嬉しそうに口元を緩めるのだ。
彼女の発言は、自分の恋人である悠樹の夢のため。
あなたに抱かれるという屈辱も――事後に、悠樹からのたっぷりのご褒美があれば耐えられると思っているのだろう。これほどまでに上品な女が、あなたの魅力に惚れるわけはないのだ。黒嶺蓮を彼女にしているあなただから、耐えられる事実の再確認なのだが――
白雪の発言が徹頭徹尾、あなたに媚びるための嘘であるとしても――
「ねっ、白雪のことどう思った？」
と、悠樹に尋ねられると”とにかく孕ませたい”以外の返答が出来るはずもなく――
肩を”びくっ”と弾ませた白雪に、あなたはただ、罪悪感を抱くばかりであった。

「そっかぁ……悠樹くん、そういうこと考えそうだなぁ～……」
性行為を終えて、互いにベッドで身を重ねながら――
黒嶺蓮は、あなたの説明に相づちを打つ。
今回のスワッピングの全ての選択権は、蓮にのみ存在するのだ。
あなたは嘘を吐けず――
黒川白雪という美少女にたまらなく繁殖欲を揺り動かされたことを暴露した。
世間知らずの、男嫌いの、黒髪ロングの爆乳お嬢様の初めての男になりたいし――彼女の身体に思いっきりちんぽを打ち付けたい。叶うならばパイズリもしてほしいし、精液を全部ごっくんしてもらって、飲むだけでイく女にしたい――と――
「……私ね、先輩が正直に言ってくれるとこ……大好きだよ？」
あなたのどうしようもない性欲も――
黒嶺蓮は、全てを受け入れてくれるのだ。
嘘を吐かないで、とあなたに告げたのは彼女であり――あなたの性欲が激しいように、彼女もまた、それは同様なのだ。スマホの動画サイトでＡＶ男優の一日のルーティーンを眺めて、最高射精回数を聞いて「うわぁ……いいなぁ……っ♡」と、あなたの膝の上で呟いてしまう少女なのだ。互いに隠し事がない関係であり、黒嶺蓮にとってはあなたの性欲も受け入れる他になく――

だが――
あなたの発言は全て、蓮がそれを否定してくれることを前提にしているのだ。
月島悠樹は巨乳の女であるが――精神的には、色黒陸サーファーのヤリチン男と同じであるのだ。
蓮にとっては、ペラッペラな嘘で相手を誤魔化して、女を口説く人間は最低ランクに存在する。あなたに気を使って許可を出すのではなく「いくら先輩のお願いでも……やなものは、やだ」と言ってくれるからこそ――
あなたも、蓮に甘えていた部分があったのだが――
「……悠樹くんかぁ……」
蓮は――
「んっ……や、だけどぉ……や、じゃないかな……っ♡えへへっ、自分でも微妙なとこだなぁ……♡
……好奇心と、興味はすっごいあるよ？……ただの浮気なら、先輩に悪いけど……でも、その……
先輩はぁ……その可愛くておっぱいが大きい、白雪ちゃんとするんでしょ？
じゃあ、んー……っ、悩むなぁ……っ♡」
どこか、スワッピングの提案に興味津々なのだ。
相手が男であれば抱かれるのは絶対に嫌でも――
月島悠樹の、男では味わえないバイセクシャルのテクニックには、内心で興味津々であるのかもしれない。
違った方向に路線が行きそうだな、と考えていると――

「ねえ……その白雪さんの写真、ある？」
と、蓮はあなたに尋ねてくる。
あなたの決意を揺らがせるために、あれから、悠樹は白雪の隠し撮り写真を送ってきたので――枚数は豊富。蓮はあなたのスマホを操作して、その画像を眺めていき「うっわ……おっぱいでっか……」「すっごいエロいね……」「これは……男子、絶対勝てないやつだぁ……」と、評論家のような台詞を口走る。
「んっ……気になったのはね、その、白雪さんの方で……同じ学部だから、見たことあるんだよね～……いつも一人で、男子に声かけられても、逃げててね？……んとっ、レズビアンってのがね……彼女の性癖ならいいんだ？……もしくは、性自認が男の子だったらね？別に、そういうのに偏見はないんだけど……ただ、さぁ？
親に、山奥の女子校に入れられて……言っちゃなんだけど、閉鎖空間で歪んだ性癖に育てられて……そんで、新歓コンパで、悠樹くんみたいな悪い女子に食べられちゃうなら……かわいそうだなぁ、って思って……っ」
蓮は白雪の写真を眺めながら――
”すりすり”と、太腿をあなたの脚に絡めてくる。
すべすべでむちむちな太腿が、あなたのすね毛だらけの脚に絡みついてくるのだ。何とも官能的な触り心地に、ぞくぞくと、あなたの背筋に鳥肌が浮かぶ。
「ねっ、スワッピング……受けてもいいよ？でも、一個だけ条件を付けてもいい？」

蓮はあなたのスマートフォンを操作して、メッセージアプリを起動する。お目当ては、月島悠樹のアカウント。「黒嶺蓮です。スワッピングの提案は聞きました。私はＯＫです」と簡素なメッセージを書き込んで――後は、送信ボタンを押すところまでだ。

「もしもの話だし……白雪さんからしたら、ふざけるなかもしれないんだけど……

白雪さんがもしね……男の子が好きな身体なのに、環境のせいで、自分は女の子が好きだ〜って勘違いしちゃってたら……の、パターンだけでいいんだけど……

そしたら、さぁ？……白雪さんに、男の子の良さ……教えてあげられる？」

蓮は――

あなたを見つめながら、真剣に尋ねる。

嘘が大嫌いな上に、むっつりドスケベな彼女にとって――

白雪の親の所業は、かなりの地雷であったのかもしれない。

性癖というのは素直に存在するべきであり「変な虫を付けたくないから」という理由でお嬢様の花園に軟禁した挙げ句男嫌いになった白雪は、蓮にとってはどうにか矯正をしたい代物であるらしい。現代的なコンプライアンスでは、アウトな価値観であっても――そもそも、カップル同士のスワッピングをこれからやろうとしてるあなた達に、何か一つとしてセーフな要素はないし――嘘を吐けない蓮にとっては、偏見でも真実なのだ。だから、諸々と一周してセーフになるのかもしれない、とあなたは考えた。

「……出来る？白雪さんに男の子の良さ……教えられる？」

蓮が尋ねた言葉に――
あなたは――
”自信はない”と、答える。
「……あははっ♪んっ……そこで、出来るって素直に言わない先輩が好きだよ？」
蓮は――
”ぺたっ”と、送信ボタンをタップする。
二秒を経た後に返信が帰ってきて――それから、蓮と悠樹はメッセージ上で会話を続ける。あなたは――蓮の身体に、四度の射精を吐き出したのだ。普段はもう少し、元気があるのだが――昼間のスワッピングの話で、精神が激しく消耗したらしい。「ん～……いいよ、はいっ♪おっぱい枕で寝ても……っ♡」と蓮に促されるまま、あなたは眼を瞑り――そのまま、睡魔に流されていった。